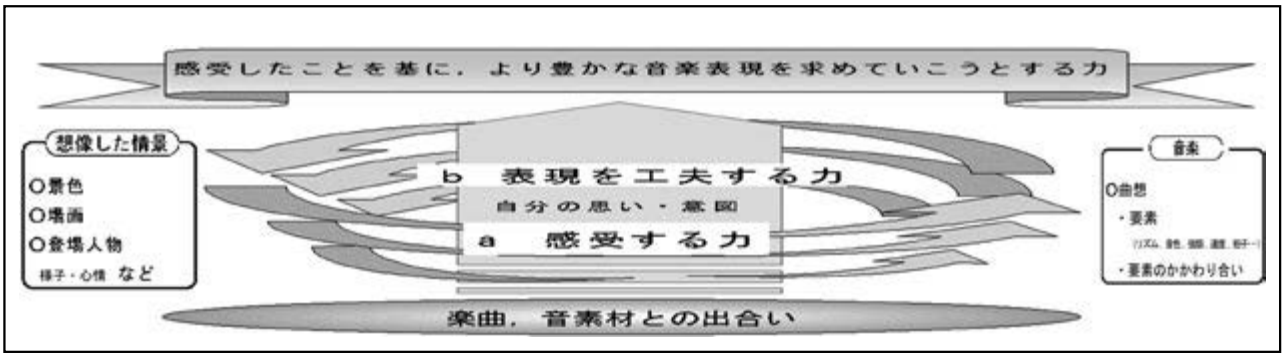
音　楽　科

1　育成したい「思考力」

a　感受する力：音楽を形づくっている要素や，そのかかわり合いから生まれる曲想を基に，音楽の情景を想像する力
b　表現を工夫する力：音楽から想像した情景と結び付けながら，音楽を形づくっている要素や，そのかかわり合い方を，自分の思いや意図をもって創意工夫する力

本年度から実施されている指導要領において，表現及び鑑賞の活動の支えとなる指導内容が［共通事項］として新設された。そこでは，音楽のよさやおもしろさ，美しさを感じ取る際に聴き取るべき音楽の要素が明確に示された。

そこで，本校音楽科では，その［共通事項］に示された音楽の要素を基に感受したり，表現を工夫したりすることを重視し，そこで必要とされる力をまとめた。それが，上記「思考力」である。



a　感受する力

音楽は，リズムや音色，強弱などの様々な要素により形づくられている。そしてこれらの要素のかかわり合い方によって独自の構造をもち，それが楽曲に固有の曲想を生み出す。

これら楽曲の独自性を基に，そこから情景を想像する力が「感受する力」である。このように「感受する力」とは，音楽的な刺激を受け取るという受動的な面にとどまらず，その刺激に対して自分の心象を形成するところまで含めてとらえる。

また，実際の学習においては，「『タッカ』のリズムがはずんでいて，踊っているような曲だなあ。」と音楽を形づくっている要素から情景を想像することもあれば，逆に「お祭りのような曲だ。」と最初に情景が浮かび，続いてその根拠となる要素を聴き取っていくこともあろう。感受する力は，このように音楽の要素と情景の双方向を行き来しながら高められていくのである。

b　表現を工夫する力

既存の楽曲の演奏を工夫する際には，自分の思いや意図を明確にもつことが求められている。そして，その思いや意図に合った表現をするために，音楽を形づくっている要素や，そのかかわり合い方を創意工夫するのである。

具体的には，例えば「速度の工夫」のように要素自体を工夫することもあれば，「旋律の呼応」のように単一要素のかかわり合い方の工夫，さらには，「旋律とそれを演奏する楽器」のように別の要素のかかわり合い方の工夫もある。

なお，この「表現を工夫する力」は，上で述べた「感受する力」に支えられていることは言うまでもない。情景を想像することで，「このような音楽にしたい」という思いが一層強まるからである。また，音楽を形づくっている要素が，楽曲にどのように働きかけるかを感じ，理解していなければ，要素を選んだり組み合わせたりすることもできないからである。

2　「思考力」を育成するための思考様式

	a　感受する力	b　表現を工夫する力
	音楽を形づくっている要素や，そのかかわり合いから生まれる曲想を基に，音楽の情景を想像する力	音楽から想像した情景と結び付けながら，音楽を形づくっている要素や，そのかかわり合い方を，自分の思いや意図をもって創意工夫する力

抽象的 ↑ ↓ 具体的

【音楽的要素の感得】

２年「２西れっ車で行こう」
音楽的要素をイメージに結ぶ

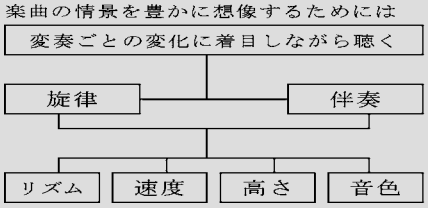
【イメージの具現化】

３年「広げよう　わたしの音物語」
表現の仕方を考える際，イメージや絵を言葉に置き換える

【音楽的要素の有用感】

５年「ルパン三世のテーマ」
ボイスアンサンブルの表現において，他の節やリズム伴奏の果たしている役割やよさを感じ取る際，主旋律以外に着目する

５年「情景を思い浮かべながら聴こう
ーピアノ五重奏曲『ます』ー」
楽曲の情景を豊かに想像するためには



【音楽的要素に着目することの意識化】

２年「２西れっ車で行こう」
イメージを音楽的要素の工夫に結ぶ

４年「詩から感じる音を表現しよう」
音楽づくりの際，イメージと音楽的要素を結ぶ

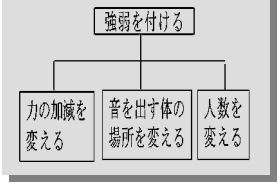
【音楽的要素を用いる場の焦点化】

３年「広げよう　わたしの音物語」
音楽づくりの際，「場面の様子」や「気持ち」と強弱，速度，音の高低などの音楽的要素を結ぶ

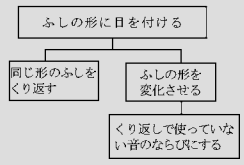
【音楽的要素の焦点化】

２年「リズムにのってわくわくアンサンブル」
リズム表現を工夫する際，身近な言葉のリズムを参考にする

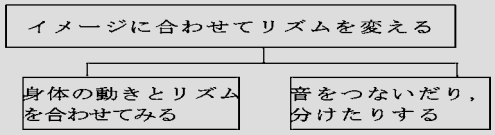
３年「ボディパーカッションで『雨』をあらわそう」
場面の変化に合った表現を工夫するには



３年「あそびうたをつくろう
ーわらべうためぐりー」
わらべ歌の感じでふしをつくるには

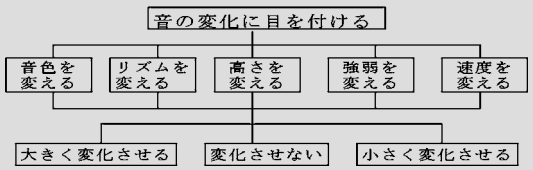


３年「にじ色の風船」
演奏の仕方を工夫するためには



４年「とんび」
強弱の変化を工夫する際には，登場人物の気持ちの変化に着目する

６年「オリジナル・カノンをつくろう」
旋律を工夫する際には



※　これらの思考様式は，実践の一部であり，全てを掲載しているものではありません。

３　音楽科におけるユニバーサルデザインの働きかけ

（１）思考の対象を「図」とするために

①　情報を精選し，選択の場を設定する

第４学年「詩から感じる音楽を表現しよう」では，夕日が沈むという情景を,それを見ている野菊の立場から想像していった。子どもたちからは「あたたかい」「さびしい」といった心情的なものや「夕日がだんだん沈んでいるから，ゆっくりとした音が聞こえてくる。」といった音楽的な要素を含んだものなど，様々な感想が出された。そこで，音楽的要素に着目した感想を軸に,似た感想をまとめていくことで,着目すべき音楽的要素を精選していったのである。そして，その中から自分のイメージを表現するために必要な音楽的要素を選択しながら，表現に必要な音楽的要素を活用していった。

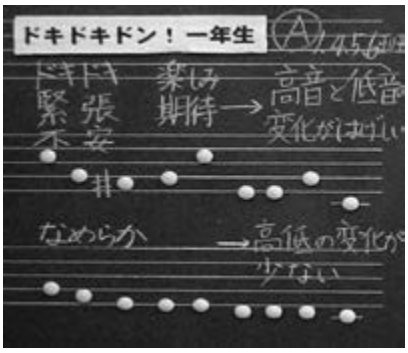
②　板書に思考の目的地と現在地を示す

第３学年「雨の音楽をつくろう」では，小雨とどしゃ降り２つの場面をつなぐ間の部分をボディパーカッションで表す方法について探っていった。その際，雨の降り方の変化がよく分かる２つの絵を思考の目的地として，距離をおいて提示した。そして，雨粒の数や大きさの変化から，音をだんだん強くしたり，だんだん弱くしたりすることに着目させて話し合いを進めた。すると，子どもたちからは，強弱を付ける方法として「力の加減を変える」,「音を出す体の場所を変える」,「人数を変える」などの意見が出された。これらの意見を板書上の２つの場面の間に思考の現在地として位置付けることで，自分たちが表現していく場面での見通しをもたせていった。

（２）思考様式を「図」とするために

①　指導方略の組み合わせにより，思考の視点を強調する

第６学年「オリジナル・カノンをつくろう」では，曲の中の盛り上がりと音の高低差の関係をとらえさせようとした。その時に,『ドキドキドン！一年生』の旋律について，原曲と教師がアレンジした音の高低差の少ないものとを比較した。まず，曲の盛り上がり部分の旋律を板書の上下に位置付け，音の高低差に着目させた。その上で，曲全体を通して聴いた。そうすることで，音の高低差が大きいと「曲の前半より変化が大きくなっているから，期待と不安の両方を表しているみたい。」，音の高低差が少ないと「全体的になめらかで，学校になじんでいるみたい。」と感じることができた。このように,「部分から全体へ」と「全体から部分へ」の指導方略の組み合わせにより，盛り上げたい部分に用いる音の高低変化についての思考の視点が強調された。



②　板書に動きをもたせることにより，思考の視点を強調する

第４学年「『とんび物語』をつくって歌い方を工夫しよう」では，繰り返し出てくる歌詞「ピンヨロー」に，どのように強弱を付けて歌えばよいかを考えていった。その際，とんびの心に見立てたハートを板書上で上下に動かす体験をさせた。そして，その時のとんびの気持ちに視点を当てながら，ハートの動きを言葉で説明させることにより，強弱の変化を工夫する際には「登場人物の気持ちの変化に着目する」という思考様式を強調することができた。その結果，「とんびがえさを見つけて嬉しい気持ちは心の動きが上がっているよ。だから強く歌うといい。」のように，イメージと歌唱の工夫を結び付けることができた。